

新宿区山吹町、甘泉園、面影橋のあたりは「山吹の里」と呼ばれている。現在「山吹の里」伝説に係る史跡は都内にいくつかある。新宿区、豊島区、西新宿など。また、東京以外にもある。埼玉越生町、神奈川県六浦もその代表である。

群馬県生越の「山吹の里」は旧小字を「山吹」というそうで、生越一門の山吹一族が住んでいたという。昭和の初め、八高線開通時、町で生越の歌を作った。野口雨情作詞の「生越小唄」ではその最初に出てくる。伝説そのものの真偽も定かではないらしく断定できないという。備前岡山の藩士湯浅常山（1708〜81）が武將の逸話をまとめたとき『常山紀談』が初出とされる。ただこれも常山一流の処世訓を記したものだともいわれる。

太田道灌の「山吹伝説」は誰もが知るところである。鷹狩に出た道灌はにわか雨に遭った。通りがかりの民家に駆け込み、蓑を貸してもらえないかと頼んだ。道灌の前に出てきた少女は、ただ黙って一枝の山吹の花を差し出したという。道灌はその意味が分からず、怒って雨の中へ走って飛び出し帰って行った。その夜このことを近臣に話した。

『後拾遺集』に醍醐天皇の皇子、中務卿兼明親王の歌「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになぎぞかなしき」という歌がある。これを教えられた道灌は、不明を恥じ、その後、歌道に精進したという。

山吹はバラ科の植物で一重の花は実がなるが、八重には実がならない。一重の場合は五本余りのめしべとおしべがある。ところが八重の花を見ると、全部のおしべが花びらに変化しているのだ。そのことはとりもなおさず、花粉ができないことになり、もちろん実もできない。『万葉集』では、なぜか実のなる一重の花は好まれなかったようで、結実しない八重が多く詠まれている。

日本の山野あるいは渓谷に自生し、枝は細いがその枝にしなるように黄色の花をつける。これがクレヨンの「山吹色」だ。